

土浦城跡本丸の発掘調査 ―かわらけを用いた最後の宴会―

江戸時代、土浦藩九万五千石の城下町の核であった土浦城跡では、数回発掘調査が実施されています。今回は昭和60（1985）年度実施の本丸の発掘調査の概要を紹介します。

昭和61年1月、この調査に先行実施した博物館建設に伴う土浦城二の丸発掘調査出土資料との比較資料と、今後の亀城公園整備の参考資料を得る目的で土浦市教育委員会は試掘坑（トレンチ）による土浦城本丸発掘調査を行いました。試掘坑は、長さ10m・幅2mの東西方向〔南側をⅠ号トレンチ・北側をⅡ号トレンチと呼びます〕に2ヶ所設定しました。掘削後に東側端で石列を、西側端では瓦の集積を発見したため、更に東トレンチ・西トレンチの2箇所を拡幅しました。トレンチを設定した地点は、公園利用者を考慮して本丸北東部とし、近世古絵図によると一部を除いてほぼ空閑地に当たっています。

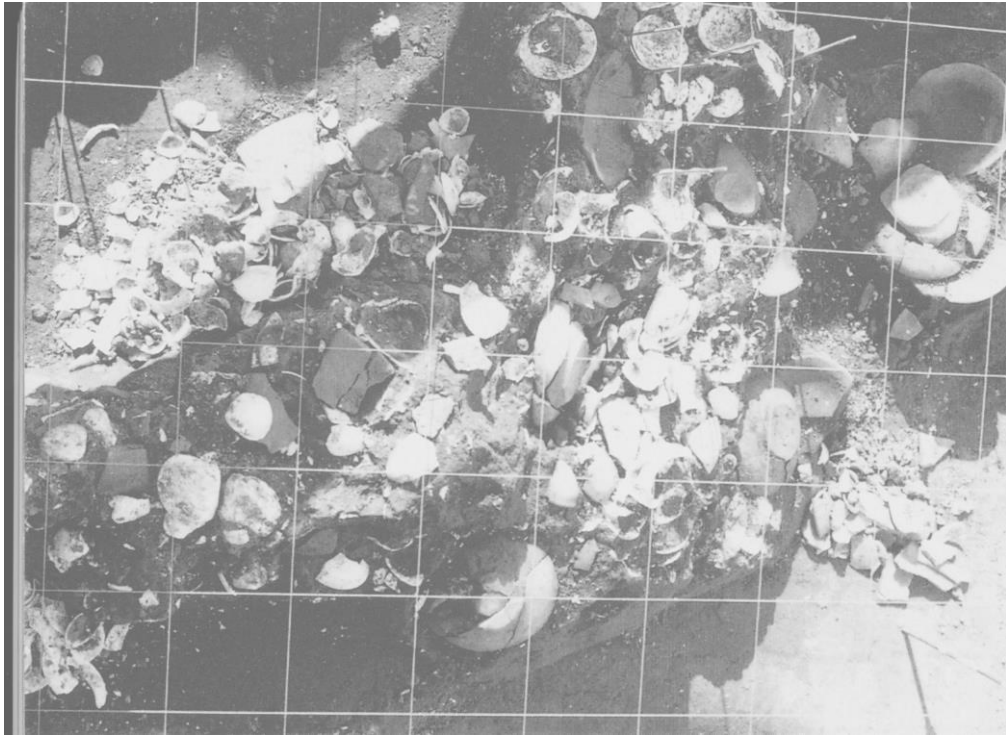
調査の結果、調査区東側で明治17（1884）年11月竣工の新治郡役所の建物基礎と石敷きの歩道を発見しました。調査区が御殿に直接かかる位置で無いため、江戸時代の建物遺構が本丸に残っているかどうかは分かりませんでした。櫓門や土塁調査等、他の調査や土層の状況を踏まえると、土浦城の本丸には18・19世紀の堆積や遺構は乏しく、16・17世紀の遺構が比較的多く発見されています。この調査では、明治17年の本丸御殿焼失層の他、江戸時代の遺構では調査区西側に土坑1基、土器等の集積〔かわらけ溜り〕3ヶ所、瓦溜り1ヶ所を発見しました。

中でも西トレンチで見つかった2ヶ所のかわらけ溜り〔1号・2号〕は、大量の土器の皿を一括廃棄している点から、中世の都市や城館の遺跡で発見されるものと同じ遺構と考えられます。かわらけ溜りは、宴会や儀式等に伴い多人数で使ったかわらけをごみ等と共に穴を掘って埋めたもので、中世ではかわらけは一度しか使わない清浄な器でした。

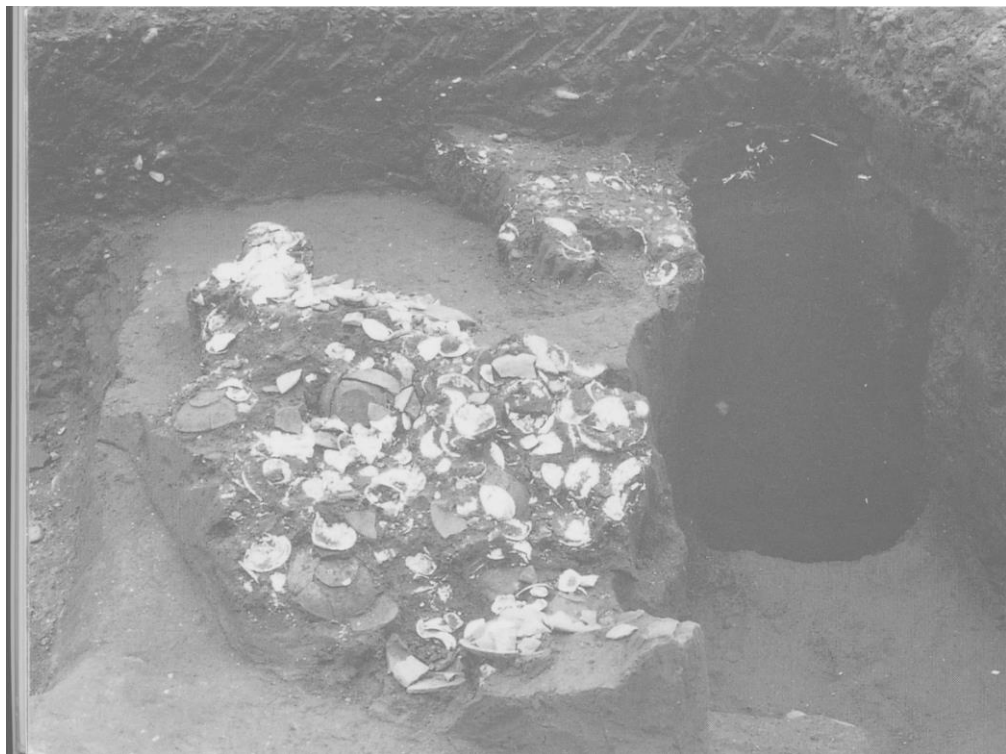
土浦城跡本丸の1号かわらけ溜りではかわらけ約70枚以上と瓦質土器のすり鉢が、2号かわらけ溜りではかわらけ約40枚と瓦質土器の鉢・内耳鍋、瀬戸美濃系の陶器で志野丸皿の破片が見つっています。双方で出土するかわらけは形が酷似し、特に口縁部の端が尖っている点は漆器の酒杯を模した可能性が高いといわれています。志野丸皿の年代は17世紀前半頃で、瓦質土器の内耳鍋やすり鉢の年代もほぼ同じ頃のものです。また1号かわらけ溜りでは、ハマグリ・サザエ・チョウセンハマグリ・アカニシ・エゾアワビ等遠隔地でないと取ることのできない貝殻も出土しています。

これらの事から土浦城本丸で発見されたかわらけ溜りは、江戸時代の前期、特に17世紀前半から半ば頃の間埋められたものと考えられます。このように土器を一度に大量に消費する形態の宴会は、近世都市江戸でも概ね17世紀代に終了すると言われていたことから、土浦城でもかわらけを使用した最後の宴会跡といえそうです。この頃の城主は藤井松平氏・西尾氏・朽木氏と城主の変更が多く、更に土浦城の整備が最も進んだ時期に当たります。

想像をたくましくすれば、これらのかわらけ溜りは新たな城主や城の建物整備を記念する宴会等に伴うものかもしれません。



土浦城跡本丸 西トレンチ1号かわらけ溜り



土浦城跡本丸 西トレンチ2号かわらけ溜り

『土浦城二の丸・本丸試掘調査 発掘調査報告書』（平成10年 土浦市教育委員会）より